

『園遊会』における帽子のシンボリズム*

百 武 玉 恵・岡 野 水 織**

The symbolism of the hat in “The Garden Party”

Tamae Hyakutake, Mio Okano

Various hats are featured in Katherine Mansfield’s “The Garden Party” besides the main characters, Laura and her mother. Furthermore, hats play an important role in Mansfield’s other works. The purpose of this study is to research what hats mean in Mansfield’s whole life and what they symbolize in “The Garden Party.” In this paper, we attempt to interpret the role of each hat appearing in the work, referring to definitions of symbols and colors. Then we point out that the relationship between Laura and her mother reflects the one between the author and her mother. We also argue that the author’s untold message to her mother is expressed in Laura’s hat and lines.

Key Words: Katherine Mansfield, hat, symbolism, motherhood

1. はじめに

キャサリン・マンスフィールド (Katherine Mansfield) の代表作『園遊会 (“The Garden Party”)] には、以下のような場面がある。

There, quite by chance, the first thing she saw was this charming girl in the mirror, in her black hat trimmed with gold daisies, and long black velvet ribbon. Never had she imagined she could look like that. Is mother right? She thought. And now she hoped her mother is right.

(下線は筆者による)

(GP 256)

この場面に代表されるように、『園遊会』には多数の帽子が登場する。まず、なぜ「帽子」が作品中に頻繁に登場するのかを考察するために、マンスフィールドの生涯を追いかけ、帽子との接点を探る。また、「シンボリズム」の観点から、帽子を登場させることが作品にどのような効果をもたらしているのかを検証する。そして作者と作品、この二つの観点から『園遊会』における「帽

子」に隠された作者の意図を探る事を本研究の目的とする。

2. キャサリン・マンズフィールドと母

加藤 (1971: 20-21) によれば、文学作品とは「特殊なしかたで処理された作家の体験」であるという。そこで作品中の帽子のシンボリズムを探るために、まずは作家キャサリン・マンズフィールドの生涯¹を見ていきたい。キャサリン・マンズフィールドは1888年10月14日、ニュージーランドの首都ウェリントンで生まれた。銀行家の父と、病弱で感受性の高い母アニー (Annie) の下、中流階級の家庭に育った。英国を舞台に活躍し90篇近くの短編小説を残すも、わずか34歳で人生の幕を閉じてしまう。恋愛、結婚を繰り返す奔放な人生を送り、妊娠、流産、弟の死を経験し、晩年は自らの死とも向き合いながら執筆活動を続けた。『園遊会』は1921年、そんなマンズフィールド最後の誕生日の夜に書き上げられた作品である。吉田 (2004: 238) によれば、彼女は小説家になるためにロンドンで新しい〈経験〉を欲していた。しかし、結果として行き着いたのは、幼い頃に家族と過ごした、懐かしいニュージーランドの風景を描くことだった。

そんなマンズフィールドの母アニーは、手塚 (2007) によると「母性というものを拒否した母」であったという。それは、彼女が妊娠と出産のたびに命の危機というストレスにさらされ続けたことが原因だったと考えられる。そのため生まれた子供達の世話は、主にアニーの母で、マンズフィールドの祖母にあたるダイアー夫人の手に委ねられることになったのだという。最も母の愛情を欲している幼い時期に、マンズフィールドはそれを得ることができなかった。この環境が、母娘関係を築いていく上での障害になったと考えられる。マンズフィールドの日記の中には、その様子が幼少時の追想として次のように書かれている。

A Recollection of Childhood.

[...] My mother paid no attention to me at all. [...]

'Now go and kiss mother,' said the grandmother.

But mother did not want to kiss me.

(下線は筆者による)

(*Journal* 101)

マンズフィールドは幼少時代、自分は母に見向きもされなかったと感じていた。一方で、家庭にしながら娘に愛情を注ぐことができなかった母の本心を垣間見る、以下のようなエピソードがある。

The Rivers of China.

[...] 'Oh dear,' she said, 'I do wish I hadn't married. I wish I'd been an explorer.' And then she said dreamily, 'The Rivers of China, for instance.'

'But what do you know about the river of China, darling.' I said. For Mother knew no geography whatever; she knew less than a child of ten.

'Nothing,' she agreed. 'But I can feel the kind of hat I should wear.' She was silent

a moment. Then she said, 'If Father hadn't died I should have travelled and then ten to one I shouldn't have married.' And she looked at me dreamily—looked through me, rather.

(下線は筆者による)

(*Journal* 234)

ここから、母アニーが結婚に対して否定的で、家の外の世界に魅力を感じていたことが分かる。すると一見、母と正反対の人生を送ったマンスフィールドも、母が望んでいた自由な人生を代わりに歩む、という形で強く影響を受けていたとは言えないだろうか。それは、母が亡くなった翌年の日記にも現れている。

May19 [...] Now it is May 1919. Six o'clock. I am sitting in my own room thinking of Mother: I want to cry. But my thoughts are beautiful and full of gaiety. I think of *our* house, *our* garden, *us* children.—the lawn, the gate, and Mother coming in. 'Children! Children!' I really only ask for time to write it all—time to write my books. Then I don't mind dying. I live to write. [...]

My little Mother, my star, my courage, my own. I seem to dwell in her now. We live in the same world. Not quite this world, not quite another. I do not care for people: and the idea of fame, of being a success,—that's nothing, less than nothing. I love my family and a few others dearly, [...]

(下線は筆者による)

(*Journal* 154)

日記からは、マンスフィールドの母への深い愛情が感じられる。このような二人の関係を象徴する「帽子」にまつわる二つのエピソードがある。それは、ジョージ・パウデンとの結婚時に起きた出来事と、*Journal* (p. 234) で取り上げた母娘のやりとりである。まずは、結婚に際して起きた出来事に注目してみよう。

マンスフィールドがパウデンと結婚したのは、母親と同じ20歳のときであった。しかし、結婚式に現れたマンスフィールドは葬式を思わせるような真っ黒なドレスに、黒い麦藁帽子といういでたちであった。買ったのはドレスではなく、あくまで結婚式にはそぐわない黒い「帽子」であった。このときマンスフィールドのお腹には、すでに関係が破綻したガーネット・トラウエルとの子供が宿っていた。マンスフィールドは子供を保護していくために父親が必要だと考え、不本意な結婚に踏み切ったのではないだろうか。その心理が、黒い麦藁帽子と黒装束に表れていたのだと考えられる。このとき結婚の報せを聞いた母は、ロンドンの娘の元を訪れているが、その妊娠について知っていたかは定かではない。一方でマンスフィールドは、結婚時と同じ帽子を身に付けて、母を迎えに駅へと赴いた。同様に母を迎える親戚が集まるなかで、二人は再会するのである。親友のアイダ・ベイカー (Baker 1994) によれば、このとき母アニーは、娘の帽子を「まあこの子ったら！それは女中がかぶるようなものでしょう。」と非難し、新たな帽子を買いに行ったのだという。母アニーの注意を引いたのは、突然の結婚をした自分の娘ではなく、あくまで「帽子」であった。ここに、母アニーの帽子に対するこだわりが見てとれる。*Journal* (p. 234) で述

べたエピソードからも、母アニーの帽子へのこだわりは分かっていたはずである。それなのに、あえて母が気に入らないであろう帽子を被ったという行動からは、母へ対する反発心の一方で、どうかして母の気を引きたいという、相反する気持ちがマンズフィールドにあったのだと推察できはしないだろうか。

母の帽子を非難する一言が、娘の妊娠を知ったうへの発言であったかどうかによって、マンズフィールドに与えた精神的ショックや、帽子に対するこだわり様には、違いが出るように思われる。手塚(2007: 194)は、「当時のマンズフィールドの孤独と不安を考えれば、帽子を非難する前に、もっと他にいうべきことがあったはずである」と述べている。手塚は、マンズフィールドの妊婦としての心理を母親が理解していなかったとして、妊娠に気付いていた前提で論旨を展開している。しかし筆者は、母アニーの行動の整合性から、次のような推論を立てた。まず、母アニーはマンズフィールドの帽子を非難したあとで、わざわざ新たな帽子を買いに向かっている。この行動からは、娘に対する怒りは感じられない。しかしその後二人は、秘密裏に出産するために、ドイツのバヴァリア地方へと向かっている。そして母アニーは、そのまま身重のマンズフィールドをドイツに置き去りにし、一人ニュージーランドへと帰ってしまった。これには一転、娘への激しい怒りが感じられる。つまり母親は、結婚の報せのみを受けて様子を窺いに英国を訪れた。すると、娘が勝手に結婚しているばかりでなく、夫以外の男性との子供を妊娠しているという事実を知った。その奔放さに怒りを覚えた母親は、娘を連れてドイツへ向かったのだという推論が成り立つ。ここから窺えるのは、母アニーが如何に体裁を気にする女性であったかということである。一見、娘に帽子を買い与えたことは、愛情によるものとも思える。しかし実際は、親戚たちを前に、自分の娘がみすぼらしい帽子を被っているという状況にアニー自身が耐えられない、という体裁を気にする気持ちからだったのではないだろうか。妊娠という重大な異変に気がつく前に、帽子を非難された娘の精神的ショックは計り知れない。マンズフィールドは、母親が見ていたのが本当は自分自身ではなかったことを、「帽子」を通して感じていたのかもしれない。

二人には埋まることのない隔たりがあった。だからこそ、マンズフィールドは母の愛を求め、その存在はマンズフィールドとその作品に深く影響を及ぼしたのではないだろうか。そして、マンズフィールドと母親の関係について語るとき、「帽子」という存在が、度々顔を覗かせてくるのである。

3. 『園遊会』における帽子の象徴

本章ではまず、一般的な帽子のシンボリズムについて定義づけを行う。そしてその定義に沿って分類した作品中の帽子群がシンボルとしてどのような機能を持っているのかを、帽子のディテールや登場場面、文体など様々な観点から検証する。また、冒頭で述べた主人公の帽子に焦点を当てることで、そこに浮かび上がる主人公ローラと母親の関係を考察していきたい。

3.1. 帽子のシンボリズム

帽子には日光を遮る、防寒するという機能以外にも、かぶる人の地位や階級、またパーソナリティを示すものとして用いられてきた歴史がある。そのため、帽子が単なる衣類以上の存在であるという共通意識が生まれ、シンボリズムとしての意味が与えられている。以下は、事典からの

抜粋である。

かぶり物／帽子

かぶり物にはさまざまな種類があるが、そのいずれもがシンボルとして他のたいていの衣類より重要な意味をもつ。かぶり物はそれを身につけた人を大きく見せるし、また相手の目の高さにあるため、非常に目につきやすい。[...] かぶり物はまた、しばしば社会的地位や、特定の集団や特定の宗教への帰属をあらわし、無文字社会でも、どの年齢集団に属するかを示すシンボルになった。 [...]

帽子は、それをかぶる人のシンボルになるにとどまらず、[...] その人自身の代役を果たすこともある。

(下線は筆者による)

(Biedermann 2000: 110-111)

hat

1. 頭に関連して、思想を表す。帽子を変えること=考えを変えること。2. 個人(個性)を「おおう」もの。3. 形状から男根を表す場合がある。たとえばフリュギア帽Phrygian cap, ブラウニーの頭巾など、円錐帽は羊飼、秘法家、予言者に特有のものである。4. かぶると同じく帽子をかぶると、見えなくなる(=退化する)場合がある。 [...]

(下線は筆者による)

(Vries 1984: 315)

このように帽子のシンボリズムは、帽子そのものにシンボル性がある場合と、帽子を伴った行動にシンボル性がある場合に分けることが出来る。この二点に留意して、作品中の帽子を見ていくことにする。

3.2. 作品を通して登場する帽子

『園遊会』には、帽子が多数登場する。ここでは、この作品に登場する帽子群を二つのパターンに分け、帽子そのものがシンボル性を持つ例(1)(2)(3)と、帽子を伴う行動がシンボル性を持つ例(4)(5)(6)を挙げて検証してみたい。

(1) But Meg could not possibly go and supervise the men. She had washed her hair before breakfast, and she sat drinking her coffee in a green turban, with a dark wet curl stamped on each cheek.

(下線は筆者による)

(GP 247)

下線部a green turbanは、ローラの姉妹メッグのもので、作品の冒頭シーンで登場する。ここで注目したいのは、ターバンの色がgreenであるということである。Vries (1984: 297-299)には、以下のように書かれている。

green 緑色

[...] 6. 中立を意味するところから、受動的、優柔不断を表す。[...] 10. 新鮮さを意味するところから、若さ、無垢、美德、を表す。[...] 20. 無知、未熟、未経験を表す。

また、須賀川(1999)によればgreenという言葉自体が「新鮮な、若々しい」という意味も持っており、ここでいうgreenは、メッグが成長過程であり、仕事を任せられるほど成熟していないことを象徴していると言える。

(2) his straw hat

(GP 248)

(2)は、持ち主である天幕張りの職人の階級を表している。ローラはその職人に心酔している。ここには、マンスフィールドの労働者階級に対する尊敬の念が表れているのである。しかし、前章で述べたように、母アニーは麦藁帽子を労働者階級の象徴として非難している。それをあえて賞賛するところに、中流階級に身を置いて夫の庇護のもとに生きる母アニーへの反発心を読み取ることができはしないだろうか。

(3) Women in shawls and men's tweed caps hurried by.

(下線は筆者による)

(GP 259)

ここでは帽子の素材に注目したい。ツイードという素材は、1800年代の英国の労働者が好んで身につけていたようである。つまり、この帽子は労働者階級を象徴している。そしてもう一つ、言及しておきたい点がある。それは、原文中の下線部‘caps’が主語として扱われているということである。原文を直訳するならば、「ショールをまとった女たちや男たちのツイード帽子が傍を通り過ぎた。」となる。これは修辞法でいう隠喩にあたる。同じ衣類であるはずの‘shawls’が‘women’に代わって主語にならない一方で、‘caps’が‘men’に取って代わり主語として機能しているのである。つまり帽子には、被るひとの代役として、主語としての機能を果たす程、強いシンボル性があると言えるだろう。

次の3つは帽子に伴った行動にシンボル性がある例である。

(4) ‘That’s right, miss,’ said the tallest of the men, a lanky, freckled fellow, and he shifted his tool bag, knocked back his straw hat and smiled down at her.

(下線部は筆者による)

(GP 248)

ここで、前節で引用したVries (1984) のhatをご覧ください。特に注目したいのは、「hat 2. 個人(個性)を「おおう」もの」という記述である。職人は、ローラにとって馴染みのない労働者階級に属する存在である。しかし職人が麦藁帽子を‘knock back’することで、職人の個性が顔を覗かせる。するとローラは階級制度による隔たりを感じなくなり、職人に好感を持つようになったのだと考えられる。

(5) In the hall, her father and Laurie were brushing their hats [...]. (GP 249)

帽子を手入れする父と兄の行動には、自らの社会的地位や階級を誇らしく思う様子が窺える。その様子はマンスフィールド自身の父親の人間性とも重なっている。ここにも作者自身の家族観が投影されているのだと考えられる。

(6) “Tell her to wear that sweet hat she had on last Sunday.”

“Mother says you’re to wear that sweet hat you had on last Sunday. Good. One o’clock. Bye-bye.”

(下線は筆者による)

(GP 250)

ここでは、強いシンボル性のある帽子を指定する言動に、シェリダン夫人の有無を言わせない影響力が表れている。そしてあくまで帽子にこだわる様子が、母アニーと重なって見えはしないだろうか。

このように、わずか30頁に満たない短編のなかで、帽子は幾度となく登場し、作品を通して登場人物のパーソナリティや職業、階級、影響力などを表現するのに用いられている。しかし、それだけではない。物語中の帽子には、マンスフィールド自身の経験や家族観、社会観があらわれてもいた。このように、『園遊会』のなかの帽子は単に一般的な象徴性を持つだけでなく、マンスフィールドの内面をも映し出しているのである。

3.3. 主人公ローラの帽子

ここでもう一度、ローラの帽子を検証するにあたって、Vries (1984: 315) のhatの象徴に関する記述をご覧ください。そのシンボリズムを、ローラの心境の変化に照らし合わせて考えていこう。まず、帽子を被せられたことで、園遊会をやめようという考え方が変わる (hat 1)。次に、家の中で唯一園遊会を取りやめようと考えていたローラの個性はおおわれてしまう (hat 2)。そして、園遊会の後で考えればよい、と自分自身で考えようとしなくなる (=退化する) (hat 4) と取ることができる。「帽子を与えられる」という行為に、ローラの内面の変化が象徴されているのである。そして、この帽子は母娘の関係を表す重要な役割を果たすことになる。ここでは、本章ですでに取り扱った他の帽子群と同じように、帽子そのものと、帽子に伴う行動という二つの観点から、ローラの帽子のシンボル性を検証したい。

3.3.1. ローラの帽子のシンボリズム

ここでは、ローラの帽子そのもののシンボリズムについて言及してみたい。

There, quite by chance, the first thing she saw was this charming girl in the mirror, in her black hat trimmed with gold daisies, and long black velvet ribbon.

(下線は筆者による)

(GP 256)

以上は、本文中にあるローラの帽子に関する記述である。これをいくつかの要素に分けてみると、1) black hat, 2) gold daisies, 3) long black velvet ribbonとなる。この帽子が、シェリダン夫人がローラのために新調したものであることを念頭に入れ、以上の3つを検証してみたい。

まず、1) black hatを見てみよう。Vries (1984: 65-66) には、以下のように記述されている。

black 黒

[死, 服喪, 悔悛, (地獄の)罰との関係]

[...] 4. 西洋美術では、黒は死, 悔悛などを表す. 5. 中世の教会では、黒(と白)は服喪と悔悛を表し、白と一緒に用いると、黒は希望, 謙虚, 無垢を暗示する. [...]

[誤り, 無知, 無]

「暗闇で手探りする」という表現は無知と誤りを表す(黒+白も同様). また、黒は色が完全に消滅した状態とみられることから死を表す. [...]

[対応関係]

[...] 3. 紋章では、さらに、悲しみ, 危険, 悲嘆, 悔悛を表す. 黒+金色で富を表す(⇒colour). [...]

[その他]

1. ダイヤモンドとの関連で、不変性, 絶対的なものを表す. (⇒ [対応関係] 4.) 中世ではとくに黒いビロードは光沢のある輝き, 堂々として光輝ある孤高を表した.

(下線は筆者による)

Black²には、私達が喪服を連想しがちなように、死のイメージがある。しかし、それだけが黒のイメージではない。まずは、無垢や無知、間違いを表すことから、自らの選択に疑問を持たずに自分を信じきっている母親のパーソナリティが感じられる。また、黒は金とあわせることで富を表すとされている。続いて検証するdaisyの色が金色であることから、これも適用でき、シェリダン家の富や豊かさを表しているといえる。つまり、母親から与えられた黒い帽子は、シェリダン家の豊かさや自分自身を疑うことがない母親のパーソナリティを暗に示しているとはいえないだろうか。

次に、2) gold daisies について見ていこう。

daisy デージー

[...] 2. キリストと聖母マリアの標章で、無垢, 処女性を表す. (Vries 1984: 163-164)

そして、花言葉を見てみると、「純潔」「無邪気」「お人好し」「無意識」「幸福」「明朗」であると言われる。加えてgoldには、次のような象徴性がある。

gold 黄金

[...] 2. 豊饒を表す. [...] d. 黄金は強欲のもとになる富や豊かさを表す. [...] 3. 錆びないため不朽不滅を表す. a. 熱を加えても変質せず、さらに純化することから、純粹さをあらわす. [...] 7. [紋章] a. 卓越, 知性, 尊敬, 美德, 威厳を表す. [...] b. 高貴, 精神の高揚,

寛大を表す。

(下線は筆者による)

(Vries 1984: 287-288)

Gold³にもdaisyにも、純粹さや幸福感のあるイメージが多く見られる。Goldは豊かさや高貴さの象徴としても用いられている。Gold daisiesからは、裕福で幸福感に満ちた中流階級のイメージを得ることが出来るが、純粹さや無邪気さというキーワードからはシェリダン夫人の性格を感じる事もできる。Gold daisies には、blackと同様のキーワードが多く見られ、シェリダン家がいかに豊かで幸福であるかを強調すると同時に、母親の無知で無邪気な人間性を主張しているようにも思えるのである。

では、3) long black velvet ribbon についてはどうだろうか。以下がリボンに関するシンボリズムである。

ribbon リボン

褒章, 卓越を表す: a very riband in the cap of youth. 若者の帽子を飾るリボンだよ。
(『ハムレット』4, 7).

(Vries 1984: 524)

このように、他よりも優れていることの象徴としてリボンは用いられる。本章で引用したblackを見ると、黒いピロードは、光沢のある輝きや堂々として光輝ある孤高を象徴するといわれている。ほかを卓越して、光輝ある孤高の存在であることを象徴するリボンは、やはり階級意識の強い母親の存在を感じさせる。また、帽子が大きなものであったということが、シェリダン夫人がローラにより強い影響を与えたいと思っていたことの表れだと捉えることはできないだろうか。以上のように、ローラの帽子は各要素においても母親シェリダン夫人を象徴するものであった。

3.3.2. 『園遊会』におけるローラの帽子の役割

帽子そのものが母親の強い影響力を表す象徴性を持っていることは、前節で述べた。しかし帽子はその後、物語のなかでどのように扱われ、どのような役割を果たしているのだろうか。帽子を被った姿の美しさに、自分の判断に自信が持てなくなったローラであるが、その場面以降も帽子の存在はローラに追い討ちをかけていくことになる。

‘The hat is yours. It’s made for you. It’s much too young for me. I have never seen you look such a picture. Look at yourself!’
(GP 256)

母シェリダン夫人がローラに与えた帽子は、夫人の言うとおりの素晴らしいものだった。そのため、母の意見に正しさを感じ始めていたローラだった。しかし兄ローリーに声を掛けられた際、ローラは一度だけ事件のことを思い出した。そして信頼する兄も母親と同様の考え方ならば、それは間違いないのだと納得できると考え、事件のことを話題に出そうとしている。しかし、ローラが口を開く前に、兄ローリーは次のような発言をする。

‘My word, Laura! You do look stunning,’ said Laurie. ‘What an absolutely topping hat!’

(GP 257)

それを聞いたローラは、園遊会を中止するべきでは、という自分の考えを兄に打ち明けられなくなってしまった。そして、屋敷を訪れた園遊会の客人たちも、帽子を被ったローラを口々に以下のように褒め称える。

‘Darling Laura, how well you look!’

‘What a becoming hat, child!’

‘Laura, you look quite Spanish. I’ve never seen you look so striking.’

(GP 257)

次々に周りの人々に賞賛され、それに気を良くしたローラは、亡くなった男とその家族のことなど忘れて客人達をもてなし、結局園遊会は成功裡に終わったのである。

先に述べたように、このローラの帽子は、母シェリダン夫人から与えられた豊かさの象徴である。その帽子を肯定されることは、ローラにとって母親の考え方の正当性を肯定されることと等しい。兄ローリーが帽子を褒めたことで、ローラは母親の考え方がやはり正しいのだと納得するかのように、自分の意見をおし止めた。そして、客人達がしきりに帽子を被ったローラを褒めちぎる。客人達は、その帽子が母親から与えられたものだとは知らない。それにも関わらず、ローラは帽子を褒められる度に、母親の意見が肯定されたかのように感じ続け、ついには事件のことを忘れ去ってしまった。そして園遊会の終わった後、ローラの母親が事件のことを話題に出すときには‘[...] Laura didn’t want to be teased about it.’つまり、園遊会を延期しようと提案したなどということではからかわれなくなかった、とまで言うのである。‘Tease’という単語自体に、ローラが事件のことを軽く捉えているというニュアンスが感じられ、ここからも、ローラの帽子による心境の変化が見てとれる。

このように、園遊会では肯定され続け、母親の正当性を主張し続けてきた帽子であったが、一転してローラ自身がこの帽子を否定する場面が訪れる。母親のアイディアにより、亡くなった男の家族の家にパーティーの残り物を詰めたかごを届けることになるのである。その役割はローラに任せられたが、ローラには、夫を失った婦人の気持ちを慮るに、それが良い考えであるとは思えなかった。しかし母親に強引に送り出され、園遊会の余韻に浸りながら屋敷を出て行ったのであった。しかし、男の家に着くころにはこう思うのである。

And the big hat with the velvet streamer—if only it was another hat! Were the people looking at her? They must be. It was a mistake to have come; she knew all along it was a mistake. Should she go back even now?

No, too late.

(下線は筆者による)

(GP 259)

ローラの気持ちを変え、家族や園遊会の客人たちにあれだけ褒められた帽子は、今や邪魔な存在でしかなかった。労働者階級の、しかも葬式という場にはそぐわないいでたちなのである。こ

ここで注目したいのは、'if only it was another hat!'の一文である。そこには、母親に与えられたこの帽子でなければよかった、というニュアンスが読み取れる。また、来たこと自体が間違いであったという文章からも、それを提案した母親への非難めいた感情が読み取れる。

また、上記の箇所と以下の箇所には、ピロードのリボンに関する記述が見られた。

Laura was terribly nervous. Tossing the velvet ribbon over her shoulder,
she said to a woman standing by, [...]

(下線は筆者による)

(GP 259)

リボンが長く垂れた帽子は、母親の存在を思わせる。しかし外の世界に出てきて緊張状態にあるローラには、母親の存在を頼りたいと思う一方で、非難する気持ちも表れている。リボンを肩の上へ投げ上げる動作は、リボンを強調する動作とも煩わしく思う動作ともとれる。この行動を強調と考えた場合、思い出されるのは母親の存在である。リボンを投げ上げて自己の階級を強調するなど、いかにも母親のシェリダン夫人がとりそうな行動である。ここでは、母親のように振舞うことで、その存在に縋りたいというローラの隠れた心理があるという解釈も可能である。しかし、リボンを煩わしく思って投げ上げたのだとすれば話は別だ。帽子が場違いであること、母親の思う正しさが誤りであることに気が付いているローラにとって、長く垂れるリボンが自分の目の入るところにあるのは耐えられなかったのかもしれない。一見同居しそうでないこの相反する二つの感情が、ローラの心に存在していたのではないだろうか。なぜなら、この帽子でなければ良かったのと言いながらも、ローラは決して帽子を外そうとはしなかったからである。

そしてローラは、家人に勧められるままに拒みきれず、男の家の奥へと進んでいく。そこには、夫の死に嘆き悲しむ妻の姿があり、ローラはついに亡くなった男と対面する。恐る恐る近づくと、男はまるで夢を見ているように美しく、幸福そうであった。そしてローラは泣きながらこう言う。

'Forgive my hat,' she said.

(GP 261)

最後の最後で、ローラは母親の間違いに確信を抱き、言葉にして自分自身の帽子の非礼を詫びる。しかしそれでも尚、母親の象徴である帽子を外すことはしなかった。帽子を脱ぐことで自身の内面がさらけ出されることを恐れたのか、母親の庇護から抜け出すことができなかったのか、言葉に行動が伴うことはなかった。そして、そのままローラは自分の家へと戻っていく。ローラ自身は母親の間違いを認めながらも、母親の帽子が肯定され、そして正しいとされる中流階級の世界へ帰っていくのである。

本章で検証した作品中の帽子群は、被る本人のパーソナリティや影響力、階級を表すものであった。しかしローラの帽子に限っては、ローラその人ではなく、母親との関係を象徴するものであった。母親との関係なしには、帽子は意味を持たなかったのである。それを踏まえたうえで、次章では、作家マンスフィールドの帽子と母親に対する隠された心理について考察してみたい。

4. 帽子に表れるマンスフィールドの隠された心理

4.1. マイナスの要素として用いられがちな「帽子」

ローラの帽子は自ら考える力を鈍らせ、労働者階級に歩み寄ろうとすることを阻み、家に繋ぎとめようとする存在であった。同様に、マンスフィールドの作品のなかには帽子が重要な役割を果たすものがある。『黒い帽子 (“The Black Hat”)』⁴はマンスフィールドが残した戯曲である。そのストーリーは、ある夫人が愛人とのかけおちを試みるが、愛人の被っている黒い帽子にあまりにもセンスが感じられなかったがために、かけおちを取りやめて、家へと逃げ帰ってしまうというものである。このように、マンスフィールドの作品に登場する帽子には、人間関係にマイナスの影響を与えるものが目に付く。帽子のシンボリズムについては事典から挙げてきたように、決してマイナスの印象を与えるものばかりではない。それにも関わらず、マンスフィールドが帽子をマイナスの印象を与えるアイテムとして用いたのは何故であろうか。

第2章でも挙げたように、マンスフィールドにとっての帽子は、母との関係の象徴である。『黒い帽子』と『園遊会』に登場した帽子は、どちらも登場人物を家に繋ぎとめる役割を果たしていた。マンスフィールドにとって帽子が母親の象徴であったなら、帽子=母が、マンスフィールドに家中心の人生を送らせることを望んでいた、という解釈が可能である。そしてそんな母親は、体裁や階級ばかりを気にする「働かない貴婦人」であった。労働者階級で執筆活動続けるマンスフィールドには、そんな母の甘さを否定する心が、反発心として存在していた。そして渡英、妊娠、結婚と反発すればするほど、母との関係は修復が困難になっていったのである。帽子によって作品中にマイナスの変化が起きるのは、それが報われない母娘関係の象徴だからである。そうならば、マンスフィールドの作品においても、人間関係に疑問が生じ、破綻するときに帽子が用いられるのは必然性のあることなのかもしれない。

4.2. 'Forgive my hat.'に隠された心理

『園遊会』は、マンスフィールドが暮らした家と家族をモデルにしたと言われている。それならば、そのなかに登場する主人公ローラと母シェリダン夫人、そしてマンスフィールドと母アニーの母娘関係は、同じような関係として描かれるはずである。しかし、そこには相違点が見受けられた。そこから、『園遊会』の最後のローラの台詞'Forgive my hat.'に込められたマンスフィールドの心理を探ってみよう。

まずは共通点について考察してみよう。ひとつに階級意識が挙げられる。前章で述べたように、男の死をきっかけにローラは中流階級のなかの常識に疑問を抱き労働者階級の人々に歩み寄りを見せている。これはマンスフィールドにも共通している。マンスフィールドは自ら中流階級を飛び出し、労働者階級に身を置いていた。働かずに子供を産むばかりの生活に倦んでいる母親に対し、反発心も持っていた。次に帽子を与えられるという経験が挙げられる。前章で、ローラの帽子はシェリダン夫人の影響と階級意識の象徴であるという解釈を行った。一方でマンスフィールドにも、母アニーから帽子を与えられた経験があった。労働者階級を象徴するような麦藁帽子を母親に非難されて、別の帽子を買い与えられている。これも同様に、母親の影響と階級意識を示している。

しかし、二人のとる最終的な行動と、各々が置かれた立場には違いが見られた。まず、最終的な行動についてだが、主人公ローラは、母に対して自分の意見を主張するも、結局園遊会を中止

しなかった。また、男の家にバスケットを届けるという母親の提案が正しいとは思えなかったが、その意向通りに行動している。そして何より、‘Forgive my hat.’と帽子の非礼を詫びながらも、最後まで母親の象徴である帽子を取ることはなかったのである。このようにローラが母親に従順であったのに対し、マンスフィールドは常に反発を繰り返していた。二人の立場の違いについてはどうだろうか。ローラは労働者階級へ歩み寄るも、あくまで中流階級の娘であるという立場は崩さなかった。それは帽子を取らなかったという行動にも表れている。一方でマンスフィールドは、生まれは中流階級であっても労働者階級に身を置き、母親に対してもその立場から接してきたのだ。共通点や相違点を挙げてみると、ローラは、労働者階級へ憧れや興味を抱きながらも、それに無理解な母親の庇護からまだ逃げ出すことのできない、幼き日のマンスフィールドの姿を内包しているのではないだろうか。

『園遊会』は、マンスフィールドが迎えた最後の誕生日の夜に書き上げられた作品である。母アニーはすでに亡くなっており、マンスフィールド自身も死の恐怖と向き合いながら執筆活動を続けていた。まさに母親との関係が始まったとも言える記念日に、マンスフィールドは何を想って筆を走らせていたのだろうか。ローラは母親の間違いに気が付き、認めながらも最後まで母親の庇護から逃れることはなかった。それは、幼い日のマンスフィールドの姿であり、帰りたいと願っていた姿なのではなかろうか。ローラが亡くなった男に向けた‘Forgive my hat.’という一言は、亡くなった母へ向けたメッセージでもあったのかもしれない。マンスフィールドは、母が生きたいと願っていた自由な人生を歩んだ。しかしそれは、母親から見れば奔放な人生ともなった。母アニーが英国を訪れた際、マンスフィールドは黒い麦わら帽子を被って迎えに行った。それはたしかに、母の望むような姿の娘ではなかったかもしれない。しかし自身の死を間近に感じながら、マンスフィールドは、母の望むような娘でいられなかったことに罪悪感を抱き、母親に許しを請いたかったのではないだろうか。マンスフィールドが『園遊会』に描いたのは、故郷ニュージーランドの風景であり、幼き日の自分の姿であった。そしてそこには、心の底にあった母へ対する深い思慕の念が表れ、母への愛情と謝罪を込めた作品となったのだと考えられる。

5. 考 察

筆者は冒頭で、本研究の目的を『園遊会』における「帽子」に隠された作者の意図を探ることとした。そして、それを探る方法として、マンスフィールドの生涯を追いかけて帽子との接点を探り、作品中の帽子の存在を読み解くのにシンボリズムの観点をを用いた。

その過程を通して、帽子には確かに強いシンボル性があることが明らかになった。帽子は、それを被るひとのパーソナリティや社会的地位、職業を強く象徴していた。また、それを扱う人の個性を強調し、ときにはその個性を覆ってしまう効果もあった。そのため、作品中に詳しい説明を加えずとも、その人の社会的立場や人間性や状態を暗に示すという役割を担っていたのである。『園遊会』に登場する帽子も例外ではないが、特に主人公ローラの帽子が示していたものはそれには留まらなかった。そこには、ローラと母親シェリダン夫人の関係性が表れていた。そしてそこに投影されていたのは、マンスフィールドと母アニーの関係であり、隠された母への想いだった。作品の最後で‘Forgive my hat.’と詫びたローラは、黒い麦藁帽子を被って母を迎えに行ったあの日、マンスフィールドが言えなかった母親への謝罪を代弁していたのではないだろうか。筆

者が、冒頭でローラが帽子を受け取る場面を採り上げたのは、そんなマンスフィールドの本心が語られるきっかけの場面だったためである。マンスフィールドにとっての「帽子」は、母との関係の象徴であったのだ。

マンスフィールドが帽子にこだわる理由については説明をつけることが出来た。しかし何故、作品中や作品のタイトルに黒い帽子を多用するのか、そして黒い帽子を被って母親に会いに行ったのかなど、「黒」にこだわる理由については、理由を発見することができなかった。また、柴田（1994）によれば、マンスフィールド作品にはその色彩語についても特徴があるとされ、これを今後の研究課題としたい。

注

*本研究は、岡野水織。2011。「『園遊会』におけるシンボリズム—帽子からみるマンスフィールドと母の関係—」（九州ルーテル学院大学卒業論文）に加筆・修正を施したものである。

**九州ルーテル学院大学第11期卒業生

1. Mcalpine (1994) を参照
2. 黒のもつイメージについては伴 (2005) を参照
3. 金色のもつイメージについては伴 (2005) を参照
4. Mansfield (1999) に収録

文 献

() 内は本稿で用いている略号

- Baker, Ida. *Katherine Mansfield: The Memories of LM*. 『思い出のキャサリン・マンスフィールド』木村康男訳。東京：開文社。1994.
- 伴浩美。「日英色彩語の連想イメージ比較」『国際教養学紀要』1 (2005): 117-128.
- Biedermann, Hans. *Knaurs Lexikon Der Symble*. 『図説 世界シンボル事典』藤代幸一、宮本絢子、伊藤直子、宮内伸子訳。東京：八坂書房。2000.
- 加藤周一。『文学とは何か』東京：角川書店。1971.
- Mansfield, Katherine. *Collected Stories of Katherine Mansfield*. 『マンスフィールド全集』大澤銀作、相吉達男、河野芳英、柴田優子訳。東京：新水社。1999.
- 一. *The Garden Party and Other Stories*. London: Penguin Group. 1951. (GP)
- 一. *Journal of Katherine Mansfield, Definitive Edition*. Ed. Murry, John Middleton. London: Constable and Company. 1954. (Journal)
- Mcalpine, Rachel. *Katharine Mansfield in New Zealand*. 『マンスフィールド研究序説』大澤銀作訳。東京：文化書房博文社。1994.
- 柴田優子。「マンスフィールド文学の絵画性」『中央学院大学人間・自然論叢』28 (1994): 117-148.
- 須賀川誠三。『英語色彩語の意味と比喩』東京：成美堂。1999.
- 手塚裕子。「キャサリン・マンスフィールドと母—母と娘の葛藤—」『川村学園女子大学研究紀要』18 (2005): 191-120.
- Vries, Ad de. *Dictionary of Symbols and Imagery*. 『イメージ・シンボル事典』山下主一郎主幹、荒このみ[ほか]共訳。東京：大修館。1984.
- 吉田良夫。『英国女性作家の世界』大阪：大阪教育図書。2004.